

# テレビ番組における時間デザイン

—初期ニュース番組生成プロセスと時間要素の相関に関する考察—

Time Design on TV-Program: The Consideration of Interrelation between Time Element and Generating Process of Early News Programs

古川 柳子\*

Ryuko Furukawa

## 1. はじめに

本論文は、日本のテレビ視聴の基本的なスタイルが形作られた1960年代前半に登場し、今日のニュース番組の原型を創ったといわれる2つの番組の生成過程を例にとりながら、「番組」という枠組みの基本的デザインに、「時間」という要素がどのように関与しているかを考察することを目的とする。

20世紀後半、放送、特にテレビが社会の時間編成に大きな影響を及ぼしたメディアであったとする論考は数多い。近代生活の時計化が最終的にテレビによって細密化されたとする真木悠介の指摘（真木, 2003）、「日常生活の中で時間とメディアが厳密に連動するという概念は放送が始まるまで存在しなかった」とし、ナショナルな時間割を家庭に挿入したことがテレビの最大の作用だったとする吉見俊哉の考察（吉見, 2003）、後藤和彦の編成論（後藤, 1967）や佐田一彦の放送と時間の関係性の解説（佐田, 1988）、藤竹暁のテレビの『同時性』の社会的影響や（藤竹, 2004）、ルネ・ベルジェの

テレビの時間特性が人間の心象に与えている作動の分析（Berger, 1976）等、テレビが社会的時間に及ぼした影響はさまざまな角度から論じられてきた。しかし、「テレビの何が、どのように」社会時間を編成するというような作用に繋がり得るのか、逆に、テレビ番組の在り様に社会の時間がどう影響を及ぼしているかということに関する、実例に即した具体的な考察はあまり見当たらない。

テレビ研究の中での「番組」をめぐる議論はその「内容」が対象とされることが多い。しかし本論文で著者が着目するのは「番組」という枠組みである。テレビとは、時間という地盤の上に、時間軸を孕む映像という表現手段で「番組」を構築し、その隙間の時間を販売する、いわば時間産業そのものである。「番組」という言葉も、自明なものとして厳密に定義されぬまま使われる傾向があるが、放送法でも「放送番組とは、放送をする事項の種類、内容、分量、および配列をいう」と定義されているように、

\*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：時間のデザイン、情報速度、時間共有、編成企画、番組構築、映像演出

「番組」には「何を」を見せるかだけでなく、「どのぐらいの時間」「どういう順番」で見せるかという時間的な概念も含まれる。また「番組」は、テレビと視聴者が映像を媒介として時間を共有し、日々生まれる社会の出来事と人間の記憶を繋ぐ装置という側面も持っている。放送史に残るとして挙げられる「アポロ11号月面着陸」「ケネディ暗殺」「浅間山荘事件」「東欧革命」「湾岸戦争」「同時多発テロ」等は、日本人の多くがまさに「出来事が出来事になっていく時間」をテレビ画面で同時に見つめた出来事であり、多くの場合、その映像を見ていた自分自身の人生の一場面と共に思い出されるのではなかろうか。今日、私たちが持っている「心象」は、どこまでが自分の直接体験で、どこからがメディア体験なのか曖昧になりがちだが、個人の「心象」となっている映像が多くの人々に共有されればそれは社会の記憶となり、蓄積されながら歴史という時間を形作っていく。メディアと時間の関係は個人の記憶や歴史の生成にも密接に関わる重要な問題ともいえる。しかし、この「時間」という要素がどのように「番組」のデザインに織り込まれているのか、それは社会との間でいかなる機能を果たしているのか、ということは先行研究の中であまり重視されてはこなかった。

2004年、私は「番組」生成過程への社会的諸要因の関与を明らかにするために、新しい視聴習慣を創造した画期的な番組として、テレビ史の中に位置づけられている報道情報系の六番組について、番組立ち上げに関わった制作者たちへのインタビュー調査、資料調査を行った<sup>1</sup>。対象番組を「報道情報系・レギュラー・生番組」

としたのは、技術的、社会的変化に伴い番組内に複雑な時間性を内包してきたジャンルであるという理由による。この調査の中で「番組」とは相互に関連しあう3つのプロセスを経て生成されており、番組制作者たちは各段階で、視聴者の生活時間や認知時間など質の違った社会的な時間を意識しながら番組デザインを決めていることに気がついた。その3つのプロセスとは、24時間365日の時間の地盤の上に放送時間を設定し、番組コンセプトを企画する「編成企画」、その企画概念を具現化するために番組内の時間・空間構造を、技術的、経済的な制約に合わせて構築する「番組構築」、構築された番組の枠組みに情報を映像化して流し込む「映像演出」である。このそれぞれのプロセスで、どのような時間要素がどのように番組デザインを規定しているかを詳細に検討することは、視聴者をめぐる社会の時間と番組に埋め込まれたテレビの時間の関係を考察するうえで、有効な方法だと考える。

本論文では、この調査で得た日本のニュース番組の原型を作ったとされる『きょうのニュース（NHK・1960～1972）』と、日本型キャスターニュースの魁といわれる『ニュースコープ（TBS・1962～1990）』の事例をもとに、当時としては画期的とされたこれらの番組デザインに対する時間要素の関与を「編成企画」「番組構築」「映像演出」の3つの観点から分析する。論文構成は、2章でテレビ編成史における対象番組誕生の時代的位置づけを確認した上で、3章、4章で『きょうのニュース』と『ニュースコープ』の生成過程と時間要素の関係を考察する。5章では2つの事例および、そ

の後の報道番組にとって大きな時間要素と確認される、映像の「情報速度」およびテレビと視

聴者の「時間共有」と番組デザインの関係を分析し、終章では今後の研究課題を確認したい。

## 2. 考察対象番組の報道情報番組編成史における位置づけ

まず、報道情報番組の編成史における考察対象番組の時代的位置づけを確認しておく。今日でこそ、テレビは速報性に優れたメディアとされ、プライム時間帯にNHK、民放各局に大型ニュース番組が並んでいるが、このような状況が日常化するのには、1970年代後半から大きく進んだ取材や中継における放送技術革新と大型報道番組を支える経済的裏づけが番組編成に反映されるようになる1980年代以降である。1974年に初めてゴールデンタイムに編成された『ニュースセンター9時（NHK）』は、放送技術の進歩を受け止め新しいニュース表現に挑戦する先鞭をつけた。80年代に入ると民放各社も報道に力を入れ始め、1983年の番組統計では「報道」と分類されている放送時間が民放でも40%を超える（萩原・川端、2001）。1985年に編成された『ニュースステーション（テレビ朝日）』の成功は、残業などで9時には帰宅できない人々の需要や、日本人の視聴傾向が変化してきたことを可視化し、各局の午後10時以降の報道系番組編成への流れの転換点となった。

それまで自明のものとされてきた日本人の基本的なテレビ視聴傾向が形成されたのは、平日の平均テレビ視聴時間が今日とほぼ同じレベルの3時間に近づき、食事に合わせるように朝昼晩の視聴ピークが明確に現れてくる1960年から65年の間といわれる<sup>2</sup>。今日の報道情報番組の原点となる番組が続々と登場するのもこの頃

だった。放送開始当初のニュースの状況は、1953年のNHK編成表によると午後0:50から4分、午後7:20から5分の二回、1955年でも正午に15分、午後7時と9時に各10分編成される程度だったが<sup>3</sup>、1960年には「アナウンサーがカメラにむかってニュースを読む」いわゆるニュースの基本形を定着させたと言われる『きょうのニュース（NHK）』の放送が始まり、1962年にはキャスターニュースの魁と位置づけられている『ニュースコープ（TBS）』がスタートした。それまで「テレビ視聴には不向き」とされていた朝の時間帯に『木島則夫モーニングショー（NET・現テレビ朝日）』が毎日放送されるようになったのはその二年後。今日こそ、「ワイドショー」というジャンルの先鞭をつけたとされる番組だが、番組開始当初は朝の時間帯開拓の中で「今、画面の向こうにいる主婦にとってのニュースとは何か」という問い直しから始まったニュースショーであった（浅田、1968）。

テレビがマス・メディアとして成立するには、「マス」といえる数の人々に同時に情報を届ける情報速度や、その人々がテレビと時間を共有するための番組の定時性、周期性などの前提が必要だ。だが、その前提をテレビは最初から持っていたわけではない。1953年の放送開始当初、東京・大阪・名古屋のきわめて局地的にしか見られなかった放送を全国に届けるため

には基幹マイクロ回線の設置が必要であり、電波中継のためのテレビ局開設免許を大量発行する目途がつくのは1958年のことだ<sup>4</sup>。翌1959年の皇太子御成婚はテレビ受像機普及のきっかけと言われるが、これが日本初のメディアイベントとなりえたのも、日本全国で時間を共有できる構造がその前年までに整えられた結果だった。日本人のテレビ視聴形態が形成されていく

背景には、電波普及、受像機普及等の技術的側面と、視聴需要に合致した番組の登場が相乗的に関与していたといえよう。『きょうのニュース』がスタートする1960年は、このような状況の中でテレビがまさに繁華街の「電動紙芝居」から全国を網羅する「マス・メディア」にその存在をシフトしていく過渡期だった。

### 3. 『きょうのニュース』—「情報速度」との戦い

#### 3.1 編成企画：番組誕生の背景

1960年4月、午後10時に20分番組として編成された『きょうのニュース』はNHKテレビニュース関係者にとって挑戦的な試みだったことが、当時の座談会のコメントから垣間見える。「建前だけで言えばもちろん全部のテレビニュースが今の第三の形式『きょうのニュース』式になるのが理想なんでしょうが。（本野享一NHK報道局次長・当時）」「行き着く先は、『きょうのニュース』のようなニュース・ショウ的なものではないかと思うのです。（橋本忠正NHK報道局外信部長・当時）<sup>5</sup>」しかし、当時斬新とされた「固定した顔ぶれのアナウンサーを進行役とし、アナウンサーを映し出すスタジオ映像をベースに、フィルムやテロップなどの方法を駆使し、その日一日のニュースを伝える形式<sup>6</sup>」という番組コンセプトは、今から見るとあまりにも「あたりまえ」だ。この番組の時代的意味を理解するには、「進行役のアナウンサー」も「アナウンサーを映し出すスタジオ」も存在しなかった時代に『きょうのニュース』が企画、編成された背景を知る必要

がある。

テレビ放送開始時、まだフィルムでニュース制作する能力がなかったテレビ局は、映画館での上映が終わった「映画ニュース」を借りてきて放送していた。当然、速報性など望むべくもなかった。一方、映像のないニュースは「映画ニュース」とは別に、「パターンや写真」を画面いっぱい撮りきり、アナウンサーがニュースナレーションをつけて放送されていたが、その原稿はラジオのニュース原稿の流用だった<sup>7</sup>。まだほとんどの人がニュースはラジオで聞いていた当時、NHKの報道セクションはラジオ局内にしかなかったのである。1954年からはNHK自局で撮影したニュースも放送し始めたが、まだフィルム現像所も局内にはなく、撮影してから放送するまでの現像、焼付け、編集等の工程時間をいかに圧縮するかが大問題だった。地方で撮影されたフィルムを急遽運ぶ場合は、列車の車掌や乗客に託して運んでもらったというエピソードも残されている<sup>8</sup>。つまり、映像記録媒体がフィルムだけだった時代、映像情報を伝達す

る「情報速度」は「物流速度」だったのだ。視聴者からも「テレビ・ニュースの速報性ということには、自ずから『絵にする』ための制約が伴うので、ラジオや新聞のニュースとは根本から違う面があると思う。政治問題、経済問題など絵にならぬニュースの場合には、テレビはさらに弱点を露呈する。（大谷東平・大阪管区気象台長）<sup>9</sup>」と指摘される有様で、「動くニュース」は速報性に劣るニュースであり、映像の珍しさのみが求められていたのが実態だった。

「速報性のない映像」の課題は、皮肉にもテレビの力が社会的に強く認識されることによってより大きく浮上していく。1959年から始まった60年安保をめぐる激しい議論や動乱は、テレビでも現場からの生中継やフィルム映像で連日放送された<sup>10</sup>。当時NHK社会部の記者だった梅村耕一は「60年安保の頃は一日に2回ぐらい中継に出たこともあった。中継は大変だったけど、技術の人たちは文句もいわずにやってくれた」と回想する<sup>11</sup>。当時の中継車は200本もの真空管が車内で点火される巨大なもので、同じ位の大きさの電源車を必要とする、今では考えられないほど大掛かりなものだったのだ。一連の安保報道は、今起こっていることを映像で伝える状況ではテレビが独壇場になることをテレビニュースの制作者たちに認識させ、一般視聴者にも強く印象付けた。1960年の一年の放送を振り返る座談会で、当時朝日新聞の論説委員だった伊藤昇は、この年が放送ニュースに対する関心が非常に高まった年だったと総括し、次のように語っている。「その第一はなんといっても安保騒ぎです。あのときは、田舎のおばさん、お母さんも、東京の大学

に行っているうちの子供が出やせんかという身近なところから、それと同時に日本はどうなるかという心配で、刻々のニュースをむさぼるように聴視したでしょう。<sup>12</sup>」折りしもテレビの全国回線網が完成しつつある時期で、「田舎のおばさん、お母さん」にとっても、「テレビジョン」で遠くで起こっている激動を、動く映像で家にいながらにして共有する、それまでなかった体験が全国に広がり始めたのである。

1959年、NHKはラジオ、テレビを総合する本格的な報道体制整備に乗り出し、この流れの中で『きょうのニュース』も編成されることになる。本野報道局次長（当時）は『きょうのニュース』の編成方針を次のように語っている。「画になるとか、ならないとかいうことよりも、まず、ニュース価値のあるものは必ず取り上げていくという考え方から、話す人が主体になり、フィルムやその他いろんな材料を使ってニュースを伝える方式を取り入れた。まずそれを午後10時の『きょうのニュース』から始めたわけです。<sup>5</sup>」テレビへの期待の高まりの中で「テレビしか見ていない人でも重要なニュースは全部わかるようにしなければならない」という要請が、映像がなければ重要なニュースでも落されてしまっていたテレビの、報道媒体としての欠陥の克服を迫ることになったのだ。

番組開始時に『きょうのニュース』が午後10時に編成されたことに関しては、当初から「（『きょうのニュース』は）毎日午後10時からになっているが、せめてもう30分繰り上げられないものだろうか。（佐野文子・当時旭川厚生保護夫人会長）<sup>9</sup>」という視聴者の声があ

がっていた。1960年代前半にはテレビ視聴時間が伸びていたとはいえ、今日とは状況が全く違い、夜10時といえばストンと視聴率が落ちてしまう時間帯である。だが当時のニュース制作スピードを考えると、その日の出来事をその日のうちに総合的に知ること自体、立派な「速報」だったといえよう。翌1961年4月に『きょうのニュース』の放送時間は午後9時半に前倒しになり、さらに1963年4月、午後7時へと移動し

### 3.2 番組構築：「ニュースを読む人間」の機能

『きょうのニュース』にとって「アナウンサーが画面に出てニュースを読む」形式は、映像の速度が間に合わない「画のないニュース」を、ニュースを読む人間を映像化することで表現する仕組みだった。しかし、今日の実感では考えにくいことだが、当時の日本人にはアナウンサーが画面に登場することに抵抗感があり、この形式に批判も少なくなかったという。「『きょうのニュース』については、そのほかいろいろの批判もあるが、日本の視聴者は、放送のやり方について、一つのものをつかんでおらず、また、慣れていないせいだろうと思います。テレビニュースと言え、映画館でやっているニュース映画のようなものでいいんだという考え方がある。（道津編集部長・当時）<sup>5)</sup>。テレビ以前に存在していたラジオや映画のニュースでは、アナウンスは裏で読まれるものだった。「一種の機械的役割を握っていたニュース・アナウンサーが突然生身の姿をテレビ画面に現す<sup>14)</sup>」ことへの違和感があったためか、当時は「残念ながら日本では、アナウン

NHKの7時のニュースとして定着する。1960年頃はまさにテレビの平均視聴時間が急速に伸び始める時期で、テレビでニュースを見る人が増えれば、視聴者の生活時間の「見やすい時間」にその放送が求められた<sup>13)</sup>。同時に、午後7時への放送時間の移動は、後述する『ニュースコープ』が午後6時半から編成され話題を集め始めたことも無視できなかった。

サーが姿を出してニュースを読んだ時は全く評判が悪かった<sup>7)</sup>」状態で、テレビニュースの担当者にとっては「映像のないニュース」の際に何を映すのかが大きな課題だったのである。

「速報性のない映像ニュース」と「動く映像のないパターンニュース」。双方の欠点を補いながら一つの番組として成立させる試行錯誤はそれまでも繰り返されてきたが、当時の技術ではすべてのニュースを映像化することも、映像ニュースが「速報性」の壁を越えることも不可能だった。すでに米国ではコメンテーターがニュースを伝えるのが主流であることは認識されていたこともあり、NHKはそれまでフィルムとテロップだけで構成されていたニュース番組の構造を、ニュースを伝える被写体となる人間を中核に据え、映像のないニュースは原稿を読む人を映像化する番組デザインへと変更することによって、「ニュース価値のあるものは必ず取り上げる」という編成方針を実現しようとしたのである。

### 3.3 映像演出：アナウンスの型とスタジオ映像の登場

番組の編成企画のコンセプトは、最終的には映像化することで視聴者に対して可視化される。『きょうのニュース』のアナウンサーは日本で初めて、姿が映像として映る状態でニュースを読み、取材記者や解説委員などの話をスタジオで聞く役割が求められた人々だった。映像化にあたってはアナウンサーの有り様やアナウンス方法にもさまざまな議論が生じたという<sup>15</sup>。報道局からは、「アナウンサーはニュースの内容を充分理解しないで読んでいるので説得力が弱い」という意見もあったが、結局「放送記者はトークの経験がなく、外部ジャーナリストに任せるには問題がある」ということで、「厳正中立で権威のあるニュースが当然の基本」とするNHKニュースのコンセプトを体现する存在として、ベテランアナウンサーが採用された<sup>11</sup>。『きょうのニュース』の初代アナウンサーで後に「NHKの無形文化財」とまで言われるようになる今福祝の目指した型は、NHK的アナウンスの原型となったといえよう。「私はいつも、アナウンスはコザッパリ

とした平常着のような型が最も良いと言っている。庶民的で飾り気のない、それでいて品のあるアナウンスは、洗い張りのきいた平常着から感じられる親近さに通じる。この気持ちでカメラに向かえば、顔と言葉に自然な表情が滲み出て、原稿の有無に関わらず楽に話せると思う。」<sup>16</sup>

アナウンサーの登場と共に初めて画面に映し出されるようになったもの、それはその人物が存在するニューススタジオ空間だった。これは後述するように、報道情報系番組にとって社会と茶の間の「今」という時間を繋ぎ、メディアと視聴者が時間共有する「場」として重要な意味を持つ空間となっていく。「ニュースを伝える人間」と「その人間が存在する空間」の映像は、マス・メディアとして歩み始めたテレビが報道媒体へと脱皮する葛藤の中で、出来事の現場から放送までの「情報速度」の欠落を補う仕組みとして生み出された。これに、より積極的な意味を持たせていったのが『ニュースコープ』であった。

## 4. 『ニュースコープ』 — 「時間共有」への挑戦

### 4.1 編成企画：「ゴールデンタイムの入り口」の時間帯開拓

1960年にラジオ東京テレビから社名変更した東京テレビ（TBS）が、「月曜から土曜日の午後6半、まさにゴールデンタイムの入り口に新味のあるニュース番組を編成する」という方針を打ち出したのは、『きょうのニュース』開始から二年後、1962年のことだった。すでに19時以降は「ゴールデンタイム」と意識され始めて

いたが、その入り口の18時台は「サラリーマンはまだ帰っておらず女子供しか家にいない時間帯」とされ、TBSも含め各局子供向け番組が横並びで編成されていた。そんなゴールデンタイムの入り口に、当時のテレビ営業にとって「売れないお荷物」だったニュースを、30分も編成することに対する危惧は決して小さくはなかつ

たという。しかしこの編成の背景には、後にTBS社長となる今道潤三専務の「次は報道に力を入れる」という強い意向が働いていた<sup>17</sup>。すでにドラマ分野では芸術祭の賞を総なめにする力をつけ始めていたTBSだが、日々のニュース番組は相変わらず「映画ニュース」を借りてくる形式が主流だった。まだ記者クラブにも入れず、原稿も新聞の協力を頼らざるを得なかったテレビ報道担当者たちにとっても、自分たちの力でテレビならではのニュース番組を創ることは悲願だったのである。

『ニュースコープ』準備班のスタッフたちは、テレビとは何か、先行メディアとの違いはどこなのかという議論の中で、テレビが視聴されている空間や、画面を見つめている人間を意識するようになっていった。時はまさに、NHKのテレビ契約件数が1000万台を突破し、家庭内でテレビを見ることが定着していく時期だった。テレビと映画の根本的な違い、それは「家庭の茶の間の中に現実的に存在しているメディア」ということではないか。日常と地続きのメディアなら、上から下に情報を下すような既存のニュースではなく、「茶の間という空間に溶け込む雰囲気、人間が人間の言葉で伝えるニュース」のかたちを作るべきだという、熱心な議論が重ねられたという<sup>18</sup>。当時、準備班

リーダーだった宿谷禮一の記憶に蘇ってきたのがTBSテレビ放送開始時に午後7時から15分枠で編成された『東京テレニュース』という番組だった。放送開始準備の勉強のために渡米した赤枝清が、当時の日本のニュースとは全く違う、生身の人間が画面に顔を出して語りかけるアメリカの「ニュースショー」を見て衝撃を受け、帰国後日本でも実現しようと奮闘する。だがテレビ草創期の限られた制作体制では半年もたず、この番組はあっという間に姿を消した。この日本ではまだきちんと実現できていない「キャスターニュース」に挑戦しようと議論が、「人間が人間の言葉で伝えるニュース」を具現化する企画段階で集約され<sup>17</sup>、最終的に次のような番組コンセプトに繋がっていった。

「1) NHKのような官報的な雰囲気を打破し、視聴者が理解し、感動して、喜びや悲しみの反応のあるものとする。2) 10分のニュースが30分に伸びたという量の変化ではなく、質を向上させる。そのためには従来の国内ニュース、海外ニュース、スポーツニュースの枠を取り払って、総合的、弾力的な編集をする。3) 常に視聴者の関心、興味も答えることに最も重点をおいて内容の編集を行う。4) 新鮮でかつ親近感をもたせるため、従来のフィルムだけの形式から生スタジオに切り替える。」<sup>19</sup>

#### 4.2 番組構築：「現場—スタジオ—茶の間」の時間共有

準備班で最も若かった太田浩は入社五年目だった。「新しいテレビニュース番組はテレビで育った俺にできなくて誰に出来る」と意気込んだという。「ニュースをフィルムニュースから生のスタジオ放送に切り替えて、人間が顔

出しでニュースをまわすという方向にコンセプトをシフトしたメリットは絶大だった。テレビが持っている機能を使って、今まで考えていなかったようなことが出来そうだということになり、テレビの可能性がどんどん広がっていくよ



うな気がした」と太田は振り返る<sup>20</sup>。

しかし、テレビの新しい機能を駆動させる中核的存在としての「キャスター」に彼らが求めたものは、NHKが「アナウンサー」に求めたものとは違っていった。太田が思い描いたキャスター像とは、「いわゆるアナウンサーとは違って自分の言葉でしゃべり、スタジオで展開されるすべてのニュースを、映像が出たり消えたり、中継がつながったりも含めてリードする存在」だった。「キャスター」とは、どうあるべきかという議論の中で、個性を殺して原稿を読む訓練をされたアナウンサーには務まらないだろうとの理由で局のアナウンサーは選択肢からはずされた<sup>20</sup>。茶の間との接点となる存在でもあるキャスターは、視聴者に受け入れられる人間性も重要となる。その上で掲げられた選考基準は「政治、経済、国際情勢にも広い識見があり、広い視野と良識があって、カメラフェイスや声がよく、茶の間に溶け込む暖かいキャラクターで、ある程度の年配の人」と非常に厳しく、当然人選は難航を極めた。最終的に共同通信記者だった田英夫と読売新聞記者出身の戸川猪佐武が初代キャスターに決まったのは、番組開始まで10日足らずとなっていた<sup>19</sup>。

太田たちはスタジオにも新たな機能を託し、それまでになかった番組構造を実現しようとした。それはスタジオのキャスターと中継映像をひとつの画面に同時に入れ込み、中継現場にいる人間とキャスターが同画面内で会話をしている状況だ。今でこそテレビの定番的表現となっている

る、いわゆる「中継現場とのかけあい」だが、異空間の「今」をスタジオの「今」に同時に組み込む番組の時間構造は『ニュースコープ』以前には考えられなかったのである。試行錯誤の末、技術局からアイトホールという大スクリーンを使えば可能かもしれないという提案が出てきた。アイトホールとは、映像をスクリーンの裏側から投射して拡大表示する映像投射装置で、当時アメリカではボクシングなどの試合を見せる興行に盛んに使われていた。実験の結果、準備班は「これでいこう」とその場で決定。当時日本に二台しかなかったといわれるアイトホールの一台をさっそく手配する。ちなみに、二台目のアイトホールは、半年後NHKの『きょうのニュース』が押さえることになる<sup>20</sup>。

太田たちの目論見を技術的に支えていったのが中継車の小型化の成功だ。TBSは1964年に電源車が必要ない発電機装備の報道専門中継車を導入した。何か事件が起こればすぐに中継車一台だけで中継ができることは、当時の常識を塗り替える画期的なことだった<sup>17</sup>。アイトホールを窓とし、スタジオと中継先と茶の間がリアルタイムで結ばれる。これはまさにベルジュが「われわれは、同時に事件の現場と居間にいる。別の言い方をすれば、自分の家の中と外に同時にいることになる。（略）つまり、時間の同時性が場所そのものの同一性あるいは隣接性を信じ込ませるように仕向けるのである。（Berger, 1876 : 37）」と分析する状況を、日常のニュース番組の中で実現する試みだった。

### 4.3 映像演出：キャスターの映像と「時間共有」感覚

「日本最初のキャスター」といわれることになった田が、スタッフが求めるキャスター像を画面の中で実現するために、試行錯誤の中で目指すようになったのは、「茶の間の一員として家族と一緒に話しているような雰囲気でもニュースを伝えること」だったという。そのために田は、記者が書くニュース原稿をすべて自分の言葉に直して画用紙にメモ書きし、それをカメラの下の譜面台に置いて紙芝居のように引き抜いてもらいながら、カメラレンズに向かってニュースを伝える工夫をした。いわば手動プロンプターである。田が「語りかけるようにニュースを伝える」ことに拘ったのは、アナウンサーが文語体のニュース原稿を流暢に読み上げる速度が、はたして一般の視聴者の理解する時間と合っているのかと、かねがね疑問に思っていたからでもあった。「その人その人によって頭の回転速度は違うのだから、ニュースを理解してもらうためには、遅いくらいでないといけない人もいたのでしょう」と田は振り返る<sup>18</sup>。

キャスター自ら現場に取材に行き、生中継をしたり取材フィルムを持ち帰って話すスタイルも『ニュースコープ』から始まった。田は現場からニュースを伝えることの意味を「『今・ここ』この状態が現実の現場なのです。私がいる『今・ここ』に皆さんも一緒にいましょう、ということなんです」と語る<sup>18</sup>。毎日見ているよく知った人が事件の現場にいる映像を見、その人物に「この場所ではこういうことがあ

て・・・」と語られることで、本来自分とは関係のない事件現場の時空間と自分との間に心理的な関わりができる。この時キャスターは視聴者にとって感情移入し時間を共有する対象となり、その映像は無機質なナレーションと共に流される誰が撮ったのかわからないフィルムニュースとは質の違った感覚を、その時空間に対して誘発する。キャスターの存在とスタジオ空間は、視聴者に「時間の同時性と場所の同一性」の感覚を醸成し、「出来事の現場」と「茶の間」の間の「時間共有」構造を実現する媒体としてデザインされていった。

『ニュースコープ』は大方の危惧に反し放送初日から視聴率15%を超えた。この反響について太田は、「それまでの映画ニュースに慣れてきた人たちの目から見ると、非常に新鮮だったのだと思う。そういう手紙をたくさんいただいた。それから、田さんの人気がすごかったんです。」と振り返る<sup>20</sup>。今日でも「日本的なキャスター」に求められる存在意味は、視聴者にとって遠く離れた空間や出来事を引き寄せるために、快く時間共有関係を持てる存在であることに、より重きが置かれる傾向があるように思う。『ニュースコープ』が実現した、視聴者が「時間共有」したいと感ずる媒体としての「キャスター」、「出来事の現場」と「茶の間」を同時に繋ぐ場としての「スタジオ」の発想は、その後の生放送番組をデザインする際の志向性にも流れ込んでいるといえよう。

## 5. 報道番組デザインを規定する時間要素—「情報速度」と「時間共有」

二つの初期ニュース番組の事例において、どのような時間要素が番組デザインを規定してきたかを、番組生成の3つのプロセスで確認してきたが、いずれの段階でも希求されている時間要素が、映像を出来る限り同時に届ける「情報速度」と、「番組」と視聴者の生活時間や認知時間を連動させる「時間共有」関係の確保であることが見えてくる。

「編成企画」で主に意識されるのは社会の生活時間である。テレビの時間は、すでに顕在化されている社会の時間の流れに寄り添ってきただけではない。4章で触れた通り、『ニュースコープ』以前、午後6時台のニュース需要は少ないと考えられていた。しかし、そこに「茶の間の中で人が人に語りかける」というコンセプトを掲げて挑戦的に編成されたたニュース番組と「時間共有」関係を持つ視聴者が増加することで、この時間帯にニュースを見たいという潜在的な要請が醸成されていたことが顕在化し、これによって夕方時間帯の可能性を知った『きょうのニュース』も午後7時に移動することになった。ある時間帯に潜在していた生活時間の変化やメディアへの要請が、新たな番組編成の成功によって可視化され、さらにその時間帯に類似番組が誘発されることで、社会の側に新たな視聴習慣が定着するプロセスは「時間帯の開拓」と呼ばれる。番組と「時間共有」関係を持つ人々の割合を数値化したのが視聴率であり、「時間帯の開拓」は経済的にもその時間帯が「売れる時間」になることも意味する。このようなパターンはゴールデンタイムの入り口で

ニュースを見る時間感覚が定着したこの事例の現象を始め、60年代半ばの朝のワイドショー群、80年代後半の午後10時以降の大型ニュース番組群の場合など、その後のテレビ史の中でも繰り返されてきたのである。

一方、「映像演出」の段階で「時間共有」の対象となるのは、人間が映像を理解するための認知時間、映像と感覚的に同期する生理時間など、視聴者が体験する時間である。動く映像はそれ自体の動きの中に時間軸を孕んでおり、情報の受け手はメディア側の時間軸にそって映像情報を読解することを迫られる。ベルジュもテレビ・コミュニケーションの特性を、「この新しいコミュニケーションは、空間を定着した形によらないで、連続する時間と感覚の一致によって成立するのである。(Berger, 1976: 59)」と論じている。これは記号化された情報を紙等の物質に固定して運搬し、情報の伝達時間後に読者が各自の時間軸の中でその情報を読解する、新聞や雑誌などの活字メディアと大きく違う映像メディアの時間特性である。「テレビを見る」という行為自体、映像と人間の間の「時間共有」なしには成立しないのだ。このことは「映像演出」の時間デザインに対して大きな影響をもたらしている。テレビの視聴者に映像音声情報を理解してもらうためには、番組制作者はきわめて多数の人々の情報認知に必要な時間軸を意識しながら、映像の時間軸を設計することが求められる。しかも視聴者が快く同期できるテンポ、リズム、タイミングは、時代、時間帯、視聴対象等によって違う。

『ニュースコープ』が「視聴者と共にあること」を配慮に入れながら、キャスターの語りのスピードや画面の表現をめぐって試行錯誤を行ったように、番組制作者が視聴者の状況を推し量りながら映像のスピード、カットの長さ、字幕スーパーの表示、動きのタイミングなどの時間要素をデザインする作業は番組制作現場で日常的に行われているのである。

「編成企画」で設定された番組の放送時間と視聴者の生活時間、「映像演出」での認知時間や生理時間との連携を計算に入れながら、出来事の時間とスタジオの時間を同時に連携させる「情報速度」を確保し、出来事の現場と視聴者の間の「時間共有」構造を作ることは「番組構築」での時間に関わる重要な作業である。

「情報速度」を確保する技術が「番組」の中で「映像演出」に繋がって初めて、視聴者は出来事の現場と「時間共有」できるようになるわけだが、このことは、社会に対するテレビの最大の強みといわれる時間特性を日常的に担保することにも繋がっている。テレビ放送開始から5年後の1958年、『思想』の特集「マス・メディアとしてのテレビジョン」の巻頭論文で、清水幾太郎はテレビが史上初めて実現した時間特性を、現在の時間をその経過と同時的に人々に知らせることが出来、過去に繰り入れられていく現在を映像化する「実物と映像の同時性」と論じている（清水、1958：18）。確かに、街頭テレビに群がる群衆風景の背後には、別の場所の出来事を同時に共有する、人類初の体験に対する衝撃が存在していた。しかし、「実物と映像の同時性」が本当の意味で日常的に実現されるようになるのは、撮影後即映像を電波に

乗せることを可能にしたENGカメラの普及と中継の機動化が、出来事の発生と同時的な映像伝達を可能にし、送り手も受け手も共に「出来事が出来事になっていく時間」をテレビ画面で共有する経験が日常化する1980年代以降だ。60年代に『きょうのニュース』のアナウンサー、『ニュースコープ』のキャスターおよびスタジオ空間に託された機能も、フィルム時代に「物流速度」であった映像の「情報速度」を補い、視聴者との「時間共有」関係を目指して開発された仕組だった。本論文ではあまり詳しく触れられないが、『木島則夫モーニングショー』の初代プロデューサー浅田孝彦は、「視聴者との『今』の共有」に拘り直すために、ニュースに関わる人や物をすべてスタジオに持ち込んだ。ハプニングも含めスタジオのすべてを生中継して視聴者と「時間共有」しようという発想から、後に「ワイドショー」と総称されるジャンルの原型となる番組デザインは編み出された<sup>21</sup>。それぞれの時代の技術的限界の中で続けられてきた「情報速度」と「時間共有」を結びつける方法の希求は、番組の新しいかたちを生み出す大きな要因だったともいえるのである。

このように、テレビ番組の生成プロセスにおいては、社会の出来事と番組の同時性を担保するための「情報速度」を獲得し、番組と視聴者、あるいは社会の出来事と視聴者の間の「時間共有」関係を構築するための時間デザインが、「編成企画」「番組構築」「映像演出」の各段階で行われている。これらの時間要素がテレビ番組の在り様を大きく規定していることは、本論文で確認してきたとおりである。しか

し同時に、視聴者とテレビの接点である「番組」という枠組みの時間デザインが、単に「時計代わり」に計測される視聴者の生活時間のみならず、認知や感覚に関わる体験される時間との同期を意識しながら、複層的に行われていることは、テレビの時間と社会の時間の相互作用

## 6. 今後の課題

本論文は、20世紀のニュース番組の原型を作った2つの番組に焦点を当てつつ、「番組」生成への時間的要素の関与を考察してきた。しかし、この論考は365日24時間を貫く時間軸が社会的なメディア環境の中心に存在していた20世紀後半の状況を前提としている。21世紀に入って、テレビのデジタル化はテレビ受信機自体を重層的にコンテンツを送出すると媒体へと変えつつある。インターネットやモバイルメディアの普及は、断片化された映像が持ち運ばれ、「マス」と括られてきた受け手が双方向的に情報発信を行う現象を日常化してきた。これに伴い、マスメディアを中心に単一的、一方的に流れていた20世紀的メディア時間の様相は大きく変容し、重層化、断片化、双方向化されつつある。

メディアの形態がどう変わろうとも、人々の「情報速度」への希求が消えるわけはなく、人間がメディアと接触する限りそこに「時間共有」が発生する。しかし、これまで「番組」

を考察する際の重要な手がかりを含んでいると思われる。この考察をさらに進めるためには、人間の内側でテレビの時間がどう作動しているかという側面も詳細に見ていく必要がある。それは稿を改めて論考を深めていきたいと思う。

という枠組みの中で規定されてきた映像コンテンツが、時間をずらし、空間を移して視聴されることが日常化していくことは、20世紀後半の基幹的メディアとされたテレビにおける「編成」という概念の有効性、「番組」という枠組みの考え方、「映像」コンテンツの在り様などを、根底から再考することが迫られるであろう。本論文ではテレビの時間のみを考察対象としたが、今後ひとつのメディアの時間性を考察する際、個人をめぐる他メディアとの相関も視野に入れる必要も出てくる。時間という要素が人間とメディア、メディアと社会の間をどのように媒介し、相互の在り様に影響をもたらしているのかを考察していくことは、メディアと社会を相互関係的に見ていく上で、今後も重要な課題であろう。複合的に変容するメディア環境の中で、メディアと社会の時間の相関を考察する研究の方法論の開発も含めて考えていきたい。

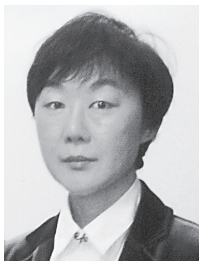
### 註

<sup>1</sup> 調査対象番組は「きょうのニュース (NHK)」「ニュースコープ (TBS)」「木島則夫モーニングショー (NET)」「ニュースセンター9時 (NHK)」「ズームイン!朝!! (NTV)」「ニュースステーション (テレビ朝日)」。

- 詳細は古川柳子（2004）：『テレビジョンにおける時間デザイン』修士論文を参照
- 2 NHK放送文化研究所編（2003）：『テレビ視聴の50年』p116-118を参照
  - 3 日本放送協会・総合放送文化研究所：『テレビ番組の変遷』『放送学研究28号』の編成表を参照
  - 4 林 進（1958）：「テレビジョンの歴史」『思想11月号』岩波書店p139を参照
  - 5 日本放送協会（1960）：「NHKのニュース放送」『NHK放送文化10月号』同上p19・p18参照
  - 6 NHK放送文化研究所（2003）：『テレビ視聴の50年』・p29を参照
  - 7 日本放送協会（1955）：『NHK放送文化第2号』p6-p8に掲載されたNHKテレビニュース担当者の座談会では初期のテレビニュース状況や、1964年始まった「映画ニュース」と「パターンニュース」を合わせて放送するための苦労などが語られている。
  - 8 後藤和彦談：2004年9月12日。東京にて対面インタビューによる聞き取り調査。
  - 9 日本放送協会（1960）：「ラジオのニュース・テレビのニュース」『NHK放送文化第10号』p8・p12・p18参照
  - 10 1960年5月16日から6月23日までの安楽関係のテレビ番組は、NHKが54本、民放30社で549本にのぼった。NHK放送文化研究所監修（2002）「放送の20世紀」p139を参照
  - 11 梅村耕一談 2004年10月31日。東京・成城学園前にて対面インタビューによる聞き取り調査。
  - 12 日本放送協会（1960）：「明日の放送のために～1960年の放送年評」『NHK放送文化12月号』p10参照
  - 13 日本放送協会（1961）：「ラジオ・テレビの特性を生かして」『NHK放送文化第4号』参照
  - 14 反町正喜（1960）：「テレビ・ニュース」『NHK放送文化1月号』p58参照
  - 15 NHKアナウンサー史編纂委員会（1992）：『アナウンサーたちの70年』講談社p311参照
  - 16 NHK（1960）：『アナウンス研究』に掲載された今福祝のコメント
  - 17 『TBS社史』p199・p110-112・p200・P219参照
  - 18 田英夫談 2004年9月14日。東京・永田町にて対面インタビューによる聞き取り調査。
  - 19 浜口浩三（当時報道部副部長）（1962）：『JNNレポート11月号』参照
  - 20 太田浩談 2004年10月17日。神奈川・横浜にて対面インタビューによる聞き取り調査。
  - 21 浅田孝彦 2004年7月31日 東京・西永福にて対面インタビューによる聞き取り調査

## 参考文献

- 浅田孝彦（1968）：「ニュースショーに賭ける」現代ジャーナリズム出版会
- 後藤和彦（1967）：「放送編成・政策論」岩崎放送出版社
- 佐田一彦（1988）：「放送と時間」文一総合出版
- 清水幾太郎（1958）：「テレビジョン時代」『思想・11月号』岩波書店
- 中山康雄（2003）：「時間論の構築」勁草書房
- 藤竹暁（2004）：「環境になったメディア」北樹木出版
- 萩原滋編著（2001）：「変容するメディアとニュース報道」丸善株式会社
- 真木悠介（2003）：「時間の比較社会学」岩波書店
- 吉見俊哉（2003）：「テレビが家にやってきた」『思想』12月号・岩波書店
- Rene Berger（1976）：『La Tele-Fission』江口真治訳（1980）「テレフィッション」竹内書店新社



古川 柳子（ふるかわ りゅうこ）  
 1957年1月24日生まれ  
 [出身大学又は最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程  
 [専攻領域] メディア論  
 [著書・論文]  
 「掌の中で起こったモードの融合—モバイル放送をめぐる時間デザイン」  
 『コミユナルなケータイ』水越伸編著（2007）  
 [所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程  
 [所属学会] 日本マスコミュニケーション学会、基礎デザイン学会

# Time Design on TV-Program: The Consideration of Interrelation between Time Element and Generating Process of Early News Programs

Ryuko Furukawa

## Abstract

The purpose of this paper is to consider how the time element takes part in generation of the TV program design. I consider this theme as an example of the generating process of two news programs that arose in the first half of the 1960's when the basic television watching style of Japan was formed. These 2 programs are said to have created the prototype of the news program of Japan.

I investigated interview study and document research on the process how these programs were made. Based on these surveys, I analyzed the relation between the time element and the generating process of TV programs from three points of view: "planning of the program" "construction of the program", and "image production". And I found that "the information speed" of image and "the Sharing time" between programs and audiences are very important time element in the TV program design.

In the 20th century, television broadcasting has been influential on the "time of the society". However, the television research had not focused in the following points very much, how the time element in the television programs have been designed, and what kind of function does the time in TV programs have in the time of society.

It enters the 21st century, we are facing to change of the media environment because of the appearance of the digital technology. Now, I think it is very important to know the correlation between TV program design and the time element for us, because the idea will become a clue to consider the relation between the time of media and the society, which will be more and more complicated in the future.

---

\*Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

**Key Words** : Time Design, Information Speed, Sharing time, Planning of the Program, Construction of the Program, Image Production.